

在宅高齢者の介護家族バーンアウト防止に関する考察

－南区長住地区における事例から－

文学部人文学科人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専攻

平成 20 年 1 月

要約

本論文は筆者の大叔母とその介護者の介護体験をうけ、介護家族のバーンアウトの生まれる背景にはどのようなものがあり、どうすればそれを防止することができるのかという問いに対して、福岡市南区長住地区で行ったフィールドワークをもとに答えていこうとするものである。以下その内容の概略である。

第 1 章では、高齢者や介護家族がどのような現状にあるのか、わが国の高齢者福祉の位置づけの変化を踏まえた上で、先行研究・調査をもとに紹介していった。

まずわが国の福祉のありかたが国家による救貧的な福祉や「措置」としての福祉がどのように現在の介護保険に代表される地方自治体主体の自立、「契約」を重視するものへと政策転換されていったかをみた。

次に高齢者の現状として、平均寿命の伸長や疾病構造の変化などにより要介護高齢者が増加したことや、世帯人数の減少による家族の問題解決能力の低下の可能性、高齢者の在宅介護へのニーズなどをみた。

最後に家族をめぐる諸相として、ここには本文にもつながる、介護家族の高齢化や介護期間の長期化など在宅介護を行う介護者の負担、またそれに伴う健康状態などの状況を明らかにした。

第 2 章では、考察の舞台となり、介護家族のバーンアウト防止という上記立てた問いに答えるためにフィールドワークを行った福岡市南区長住地区の歴史について紹介している。

長住地区は 1960 年代に高度成長期の福岡市における住宅需要に応じるために住宅公団が担当し開発されたニュータウンであり、3 つの特徴を有している。ひとつめは、既存の社会基盤のない中、新しく開発され、住民が一気に流れ込んだ新生のコミュニティであることである。ふたつめは、公団の分譲要綱や価格設定等の理由から、自然と年収や世代が近い層が多く集まってきたことである。そして最後に、政治や教育、まちづくり等に高い関心を寄せる住民が多かったことである。そして、自分たちのライフサイクルの中で生じる問題を解決するために、さまざまな住民運動が展開されていった。

開発が早い時期に始まり、また開発当時に大量に移住してきた長住第一世代が 70～80 代を迎えているため、現在長住は福岡市内においても特に高齢化の進んだ地域となっている。そのため、高齢期にまつわる問題をいかに解決していくかが現在、この地域の抱える課題であり、その解決に向けた取り組みが現在も盛んに行われている。

第 3 章では長住地区で収集した事例と大叔母の事例をもとに、介護家族がどのような問題を抱えていて、そのバーンアウトの背景には何があるのかを考察した。そして、介護家族のバーンアウトは介護者が介護に関わる肉体的・精神的負担を介護者だけで抱え込んで

しまうことによって生じるということ、その解決の糸口として、介護家族と高齢者との関係の仲立ちの役割を果たす“コーディネーター”が有効に機能しているかどうか注目した。

本論文においてコーディネーターとは、在宅高齢者とその介護家族の仲立ちとなり、様々な形の支援を行う第三者と定義した。具体的には行政、介護事業所、介護従事者(介護支援専門員、訪問介護員等)、病院、医療従事者、地域住民などが想定される。そしてその役割は、専門的技術・知識の提供、在宅高齢者・介護家族の精神的支援、在宅生活の見守りなど多岐に渡る。そのなかでコーディネーターが在宅高齢者・介護家族をあわせた介護の基礎単位と連携関係にあるか、またある介護の基礎単位をめぐる複数のコーディネーターの間に協同関係があるか否かによって、コーディネーターによる支援の有効・無効が決定されること、ひいては介護家族のバーンアウトを防止しうることを発見した。

第4章では、その連携・協同をキーワードに、介護の基礎単位に対するコーディネーターの支援のあり方をモデル化した。そのなかで基本となる「点状モデル」「線上モデル」「点状モデル」という3つのモデルを作成し、さらに点状モデルをさらに「単点型」「複点型」、線上モデルを「単線型」「複線型」に分け、それぞれが段階的に発達していくこと、またどのような支援を実現させ、介護家族のバーンアウト防止の有効・無効を分析した。

第3章では、第4章の内容をさらに深めまとめとした。本章では前章で提示した「面状モデル」が、現代的な共同体の構築といえるのではないかと主張している。また、最後に本論文で解決できなかった問題にも触れている。そこでは、本論文における主張やモデルが、“介護”以外の外部化された家族機能の領域においても適応可能なのではないかという問題を投げかけた。

目次

はじめに	・・・・・・・・・・1
第1章 高齢者や介護家族のおかれる現状	・・・・・・・・・・3
第1節 高齢者福祉の位置づけの変化	
1-1-1 福祉六法体制の構築へ	
1-1-2 「福祉の見直し論」の台頭	
1-1-3 介護保険制度	
第2節 高齢者をめぐる諸相	・・・・・・・・・・5
1-2-1 平均寿命の伸長、要介護高齢者の増大	
1-2-2 高齢者のいる世帯の変化	
1-2-3 望ましい介護の場・終のすみか	
1-2-4 要介護度別居住形態およびサービス利用状況	
第3節 家族をめぐる諸相	・・・・・・・・・・13
1-3-1 介護の担い手はだれか	
1-3-2 主介護者の介護期間	
1-3-3 要介護度別主介護者の介護にかかる時間、ストレスの有無	
1-3-4 主介護者の健康意識	
1-3-5 在宅介護者の4人に1人は「抑鬱」状態	
第2章 南区長住地区の歴史	・・・・・・・・・・20
第1節 長住地区の開発	
第2節 「第2宅老所よりあい」	
第3節 長尾下水処理場跡地利用にかかるコンペ参加「老人ホームを作る会」	
第4節 「NPO笑顔」設立	
第5節 Aさんと「ふれあい会」結成	
第6節 「見守りネットワーク手をつなごう」	
第3章 介護家族の抱えている問題および、バーンアウトの社会的背景～聞き取り調査をもとに～	・・・・・・・・・・33
第1節 Bさん(男性 77歳)の場合	
3-1-1 Bさんの事例から	
第2節 Cさん(男性 84歳)の場合	
3-2-1 Cさんの事例から	

第3節 Dさん(男性 83歳)の場合

3-3-1 Dさんの事例から

第4節 Eさん(女性 91歳)の場合

3-4-1 Eさんの事例から

第5節 各事例を受けて

第4章 基礎的介護単位とコーディネーターの関係の類型化 54

第1節 「点状モデル」

第2節 「線状モデル」

第3節 「点状モデル」

第5章 まとめ 65

第6章 おわりに 69

参考文献